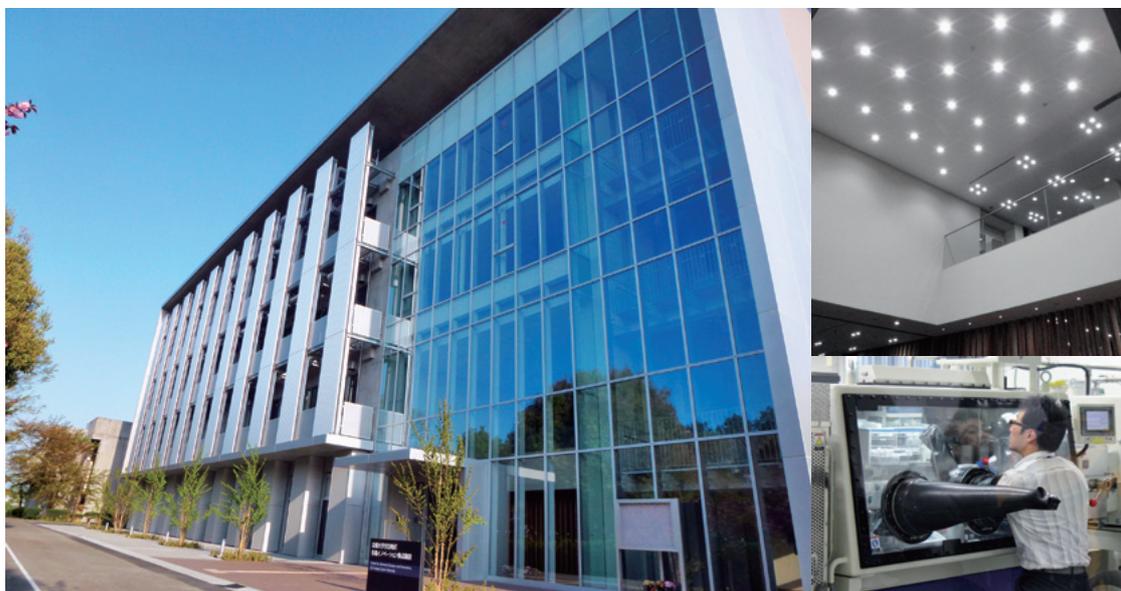




# 京大広報

No. 668

2011.6



宇治地区先端イノベーション拠点施設  
—関連記事 本文3448ページ—

## 目次

京都大学渉外部の発足 渉外担当理事・副学長 大西 有三	3444
<b>〈大学の動き〉</b>	
大規模自然災害対策・復興 全学大会議を 開催	3446
広報担当者講習会・幹部職員セミナーを開催	3446
次世代低炭素ナノデバイス創製ハブ拠点 開所式を開催	3447
宇治地区先端イノベーション拠点施設 竣工記念式典を挙げる	3448
<b>〈寸言〉</b>	
鶏頭のススメ 岸田 多門	3449
<b>〈随想〉</b>	
「唐芋」の国際交流 名誉教授 瀬地山 敏	3450
<b>〈洛書〉</b>	
最近教わった事 高橋けんし	3451
<b>〈資料〉</b>	
平成22年度総長裁量経費による採択事項	3452
平成23年度入学試験諸統計	3453

## 〈話題〉

サウジアラビア・リヤドで「International Exhibition and conference on Higher Education 第2回国際高等教育フェア (IECHE2011)」および第2回サウジアラビア —日本・大学学長会議が開催	3458
宇治キャンパスで平成23年度新入院生等の ための安全衛生教育を開催	3458
中国・清華大学でAPRU第15回年次学長会議 およびGlobal Summit of University Presidents 2011 (GSUP)が開催	3459
シンガポール国立大学で第1回APRU Provosts Forumが開催	3460
留学生のための交通安全と防災の講習会を実施	3461
小森 悟副理事・工学研究科長が清華大学深圳 研究生院創立10周年記念式典に出席	3461
「日中共同持続可能な発展人材育成短期研修 プログラム」中国代表団が東日本大震災 被災者へ義捐金を寄付	3462
<b>〈計報〉</b>	3462

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 京都大学渉外部の発足

渉外担当理事・副学長 大西 有三

京都大学に4月より発足した渉外部について、活動内容等を説明いたしますが、その前に東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故に伴う災害にあわれた方々、親族や知り合いなど関係する人が被災され心を痛めておられる方々には、あらためてお悔やみとお見舞いを申し上げます。



3月11日午後2時46分過ぎにM9.0の巨大地震から発生した津波は、東日本太平洋側に未曾有の被害をもたらしました。また、それに引き続く福島原子力発電所の事故により多くの人たちが避難を余儀なくされていますが、地震発生から3カ月が経過しているのに、未だ確たる行く末が見えない状況が続いていることは、齒がゆいことです。

「天災は忘れた頃にやってくる」の言葉で有名な文筆家にして物理学者の寺田寅彦は、昭和8年の「鉄塔」5月号(岩波書店「寺田寅彦全集第七巻」)に「津浪と人間」と題し、“昭和8年3月3日の早朝に、東北日本の太平洋岸に津浪が襲来して、沿岸の小都市村落を片端から薙ぎ倒し洗い流し、そうして多数の人命と多額の財物を奪い去った。明治29年6月15日の同地方に起こったいわゆる「三陸大津浪」とほぼ同様な自然現象が、約満37年後の今日再び繰返されたのである”と書き、教育で津浪についての知識を授け、こうした災害に関する科学知識の水準を高めることが、天災の予防に役立つと結んでいます。今回の津波災害と同じことを今後繰り返さないためには、ハードによる対策とソフトによる予防策の充実が望まれます。

京都大学では、地震後直ちに震災対策本部を設け、文部科学省などの公的機関への協力、救援物資の送付、病院からの医療班の派遣、大気中の放射線物質の測定(学内各地5カ所)、心の問題への相談窓口の設置、被災した大学からの学生や教職員の受け入れと研究協力など様々な対応をしておりますので、詳細は大学のホームページをご覧ください。

([http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news\\_data/h/h1/news5/2010/110314\\_9.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news5/2010/110314_9.htm))

さて、渉外部は、昨年(2010年)の10月より暫定的に準備活動を行ってきましたが、4月に事務本部の正式な組織として発足しました。従来の外部戦略、社会連携などを包括的に所掌する新しい部署であり、4月以降の事務組織の新体制に整合性を持たせるべく、調整を進めています。

通常の業務としては、京都大学のパブリシティの効果を上げるための活動を一つの柱とし、国内外の同窓会の活動と設立支援、様々なイベントを通しての卒業生との緊密な交流、毎年11月に行われるホームカミングデイの企画・運営、京大基金募集の活性化、品川インターシティにある東京オフィスの整備と活用(東京オフィスでの「京大の知」シリーズ講演会などの企画・運営)、新装なった楽友会館の有効活用などが計画されています。もう一つの柱は、地域連携や社会貢献に関することで、自治体・関係機関をはじめ、対外的な窓口としての機能の発揮、各種公開講座(春秋講義、市民講座、未来フォーラム、地域講演会他)の企画・実施などがあります。本学総合博物館との連携も重要な活動です。

こうした通常の業務以外に、特に戦略的に実行すべきことは、情報発信強化事業で、これは京都大学第二期重点実施計画に盛り込まれています。「京都大学らしさ」をアピールし、大学支援者との連携を強化するため、新しい視点による戦略的広告媒体を作成するという目標を立てています。日本および外国における京大の存在感を高めるために、学内のリソースである研究者や学生を積極的に活用すると

もに、国際的な京都大学ブランドの構築へ繋ぐための情報発信を行う必要があります。

この趣旨に従って、まず始めたのが、キャンパスマップ「Welcome! 京大」(A5判, カラー16ページ)の作成です。京大での大学生活にあこがれて吉田キャンパスを訪れる中・高校生に向けてキャンパス案内冊子を作成しました。この冊子は9名の現役学生が「初めて京大を訪れる人たちにもキャンパスの学生生活の魅力を感じてもらいたい」との思いを込めて企画・編集したもので、教職員がサポートしました。各構内15分程度で回れる推奨ルート、学生の口コミによるお勧めスポットを掲載するなど、訪れたみなさんにキャンパスでの学生生活の雰囲気をイメージしてもらえる内容となっておりますので、是非お手にとってご覧ください。寄せられた意見も参考に、改訂を重ねていきたいと考えています。

卒業生との連携については、従来は部局主体の同窓会活動が主なものでしたが、徐々に大学全体としての活動を強化しております。ホームカミングデイ(毎年11月第二土曜に開催)、地域同窓会の立ち上げ支援(現時点で地域同窓会の数は18に上る)、地域同窓会との合同同窓会の開催や地域同窓会総会などへの役員派遣、ホームページ上の卒業生名簿システムである「京大アラムナイ」の運営と利便性の向上策定、総長をはじめとする役員と卒業生で企業トップの方々との懇談会の開催などが実施されており、卒業生からも京大の変化が感じられるという感想を多々いただいております。今後これらに加えて、卒業生への生涯メールアドレス付与の実施、京大アラムナイ登録者増への取り組み強化などを新たな展開として考えており、京大らしい同窓会組織の充実に向けて努力しています。

大学の国際化が叫ばれる中、同窓会の国際展開については、昨年から今年にかけて世界中で16カ所の同窓会支部が活動しており、さらにいくつかの国々で新たな同窓会の設立準備が始まるなど、卒業生間の国際的な連絡網の強化がなされています。外国で

仕事をする場合とか、外国に留学する場合、あるいは旅行する場合に現地の生きた情報が欲しいときがあると思いますが、その時には現地の京大同窓会に連絡してください。既に何人もの社会人や京大生が同窓生のお世話になっています。外国の京大同窓会には、京大に留学して母国に帰った人たちの会と日本から仕事等で現地に派遣され活躍されている人たちの会と二種類ありますが、どちらも連絡が可能です。京大ホームページの「京都大学同窓会」の中に地域・その他同窓会というページがあり、同窓会連絡先の所在地・連絡先がGoogle Mapで示されていますので、各自連絡網を有効に使っていただければと思います。

もう一つ大学の将来にとって重要なのが、「大学基金」の充実です。昨今の緊縮財政の中で、また新たに大震災の影響を受けて高等教育への国の支出が減る中で、大学独自の資金により学生支援、研究助成や施設充実に回ることが必須と考えています。Endowment(寄付・寄贈)が日常生活に定着している欧米の大学では、莫大な大学基金を有するところもありますが、日本では取り組みが始まったばかりです。寄付文化の違いや国立大学として生きてきた過去の姿からするとやむを得ない面もありますが、京大の状況はお世辞にも十分とは言えない有様で、これから様々な取り組みを行って「京大基金」の充実に努めたいと考えています。今回の東日本大震災の際には、全世界から義援金が集まっています。我が国でも多くの方々の支援がありましたので、これを契機に、寄付を気軽にするという文化が根付くことを願っています。京大の基金募集などについて面白い有効なアイデアがありましたら、お知らせください。

これからも渉外部の活動について、皆様方のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 大学の動き

### 大規模自然災害対策・復興 全学大会議を開催

4月28日(木)、学内緊急企画として「大規模自然災害対策・復興 全学大会議」を百周年時計台記念館において開催した。現在、本学では震災対策本部を設置し、日々情報収集と復興支援対応の業務を行っている。同時に、関係省庁や諸団体から様々な問い



開会挨拶する松本総長

合わせがあり、大学としての対応が早急に求められているなか、「今、大学としてなすべきことはなにか?」という大きな命題

のもと、京都大学だからこそできる京都大学らしい

長期的、多角的、そして根本的な取り組みについて、講演者による活動報告の後、本学教職員79名が研究分野、職階、世代の壁を越え全学一体となって議論し、それを形にする「知行合一」の場となった。



活動報告の様子

(総務部)

### 広報担当者講習会・幹部職員セミナーを開催

5月27日(金)、山崎秀保文化庁文化部芸術文化課長(前文部科学省官房総務課広報室長(文部科学広報官))を講師に迎え、「組織における広報の視点-積極的な情報発信と的確な報道対応-」をテーマとして、広報担当者講習会・幹部職員セミナーを開催した。



講演中の山崎氏

始めに浅野敦行総務部長から山崎氏のプロフィールの紹介があった。引き続き、山崎氏から文化庁美術学芸課長当時、高松塚古墳壁画損傷事故の担当者として報道対応された経験を元に、適切な広報のあり方について説明があった。山崎氏は、広報とは「イメージーションと信頼関係の構築がキーワード」とされ、広報をする際には、構成員全

員が広報マインドを持った上で組織として活動すること、今後の展開を想像しつつ対応すること、また、報道機関と良好な信頼関係を構築することの大切さを強調され、参加者は真剣な面持ちで聴き入っていた。



熱心に耳を傾ける参加者たち

(総務部)

## 次世代低炭素ナノデバイス創製ハブ拠点開所式を開催

本学では、5月26日(木)に次世代低炭素ナノデバイス創製ハブ拠点



松本総長による挨拶

の開所式を開催した。このハブ拠点は、文部科学省の「成長戦略への布石」である「環境・エネルギー技術への挑戦」の一環として設立された

「低炭素社会構築に向けた研究基盤ネットワークの

整備」事業で整備

されたものである。

開所式では、

松本 紘総長の挨拶

に続き、柿田恭

良文部科学省研究

振興局基盤研究課

長から祝辞をいた

だいた。また、松

本総長ら3名によるテープカットが行われ、ハブ拠点

の完成を祝った。

引き続き、施設が公開されると、参加者はクラス

100のクリーン度を有したイエロールームや最先端

の微細加工装置の装置群などを熱心に見学された。



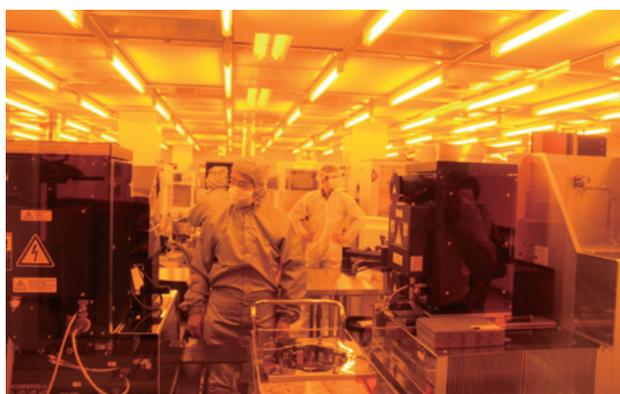
祝辞を述べられる柿田基盤研究課長

本拠点は、東京大学および物質・材料研究機構とともにハブ拠点として、環境・エネルギー技術開発における共通基礎課題に集中的に取り組むことにより、大きな技術革新のシーズを創出することを目指している。また、最先端機器を集中的に整備することにより、優れた研究成果・技術シーズを有する大学・研究機関(サテライト拠点)を支援していくこととしている。



加工・評価室内

特に本学では、低炭素社会の実現に必要な不可欠なエネルギーを「創る」「蓄える」「使う」「戻す」の4領域における様々な革新的次世代材料・ナノマイクロデバイスの研究開発を加速するため、ウェハスケールで多種基盤材料・薄膜材料をナノマイクロ加工できる装置環境を提供し、低炭素化を早期に実現するための学術研究・応用研究・開発研究と学から産業界への技術移転等に寄与していく予定である。



イエロールームの様子



左から柿田基盤研究課長、松本総長、西阪理事

(学際融合教育研究推進センター)

## 宇治地区先端イノベーション拠点施設竣工記念式典を挙行

環境・エネルギー分野における世界トップレベルの産官学連携共同研究を推進する開発拠点として、今年3月に竣工



松本総長による挨拶

した「宇治地区先端イノベーション拠点施設」の竣工記念式典が、6月1日(水)に執り行われた。この施設は、経済産業省の平成20年度産業技術研究開発施設整備費補助金の支援を受けて建設されたものである。



永塚近畿経済産業局長による来賓挨拶

この施設には、オールジャパン体制で臨む「革新型蓄電池先端科学基礎研究拠点プロジェクト」の他、次

世代太陽電池、

電磁環境生命科学、水化学エネルギーなどの共同研究プロジェクトが次々と入居し、研究を進めている。

当日はあいにくの小雨にもかかわらず、学内外か

ら150名余りの出席者を得て賑やかに開催された。

まず、施設エントランスホールでテープカットが行われ、施設見学を終えた後、おうばくプラザきほだホールに場所を移し、松本 紘総長による挨拶、永塚誠一経済産業省近畿経済産業局長の来賓挨拶、施設屋上に設置された太陽光発電システムの寄贈に



シャープ株式会社への感謝状贈呈

対し、松本総長からシャープ株式会社の太田副社長へ感謝状の贈呈、そして「革新型蓄電池先端科学基礎研究拠点」のプロジェクトリーダーの小久見善八産官学連携本部特任教授による記念講演が行われた。

松本総長は、挨拶で「宇治キャンパスは、新幹線が通る京都駅にも近く、産業が集積し発展していく地域にある。ここで、震災復興やエネルギー問題に立ち向かう、世界最先端の研究を競っていきたい」と意気込みを述べた。



テープカットの様子(左から、中島防災研究所長、西阪理事、吉川理事、松本総長、永塚近畿経済産業局長、久保田宇治市長、勝見京都府山城広域振興局長、井上産官学連携本部副本部長)

(研究国際部)

## 寸言

## 鶏頭のススめ

岸田 多門

大学を服に例えましょう。世の中には大きい服もあれば小さいのもあります。京大はLLサイズです。社会に出た当初は、体が小さいので服はブカブカです。仕事で業績を上げるたびに体は次第に大きくなっていき、うまく育てば遂に服がピッタリと合うようになります。つまり大学を卒業してからよほどの年月がたたないと、自分の選んだ服のサイズが適切だったかどうか分からないというのが人生の仕組みのようです。

私は大学を出てクラレに入り、人工皮革の開発に従事しました。しかし大企業とは噛み合わせがよくなかったので、5年後に脱サラして自動車部品の製造を始めました。以来四十余年技術開発に努めた結果、社員数は30名に過ぎませんが、ニッチな分野では世界一のブランドを持つ町工場を築くことができました。現在の服の着心地としては、おおむねフィットしているかなァといったところです。

社会人としてグングン成長して、服がすっかり小さくなってしまったという成功者も珍しくありません。しかし数からいえば生涯ブカブカの服に悩まされた京大OBのほうが遥かに多いのじゃないでしょうか？とりわけ大組織に属した人はそうでしょう。もちろんこれは才能と努力と運に左右されるのですが、それだけじゃないと私は考えています。その人の進む道が適切じゃなかったのです。

大学を出るときに大望を抱くのは悪くありません。しかしその夢が実現する可能性を冷静に計算する必要があります。十分に考えて進路を決めているといわれるでしょうが、私にはそうとは思えないのです。これほど新卒者の就職難がいわれているのに、相変わらず役所や大企業や大学等の大組織を志向す

る人の多いのが不思議でしかたありません。もっと小さな組織を選ぶ人が増えてもいいのじゃないでしょうか？

日本の産業文明が急速に劣化しています。町工場がどんどん消えているのです。その理由は経営者が高齢化するのに後継者がいないからです。おまけに町工場の八割は赤字で、今や日本では製造業が成り立たないとまで言う人もおります。しかしこれを文字通りに信じてはいけません。今の日本では弱者のポーズがなにかと得だからです。生活保護の乱発と同じ背景です。仮に八割が赤字としても二割もの町工場が黒字なのです。これは京大入試の難易度と同程度じゃありませんか。私は頃合の良い数字だと思います。もし逆に八割もの会社が黒字になれば、あのバブルの頃のように人間が墮落してしまうじゃありませんか。

職に就けない新卒者がいる一方で、後継者がいない町工場がある。それなら町工場へ就職すれば良いと短絡してはいけません。MやSの服を着ている人が町工場を経営しても赤字工場が増えるだけです。いかに小さな工場でも、知恵を出さねばやっていけません。規模の大きな企業が乗り出さない分野を見つけて、チョイと頭を使って技術開発をし、工場管理を合理化する。それが工場経営の要諦です。LLの服を着ている人ならさほど難しいことじゃありません。大学者や大企業の社長は無理かなというLLマンは、町工場の後継者という選択肢を視野に入れるべきじゃありませんか？京大当局はそれを斡旋すべきです。

私はこの夏70歳になるのを期に引退します。社員に会社を譲ります。余生は若者からのサクシュに専念します。人間はいつまで働くべきか、自分で決めるべきです。そんなことまで指図する大組織はケシカランと思いませんか？

(きしだ たもん 岸田精密工業株式会社取締役会長 URL:<http://www.keyster.jp> 昭和39年工学部卒業)



## 随想

## 「唐芋」の国際交流

名誉教授 瀬地山 敏

政治・経済の次元における地域分権・地域主権への思潮は、これからもますます強くなって行くに違いない。わたくしの大学でも地域創生専攻を設け、自立する地域のあり方を教育・研究している。その専攻では地域のすぐれた事業者を招き、「地域創生」のオムニバス講義・討論に、全学の学生が参加できるように工夫した。



この講義に唐芋を主原料とする高級ケーキを作り、日本の大都市を中心に市場を開発したフェスティバロ社の社長・郷原茂樹さんをお呼びした。3年ほど前のことである。270分にわたる講義を拝聴し、自立する地域のあり方を考えるうえで、目を開かれる思いをした。要約していえば、原料である唐芋を自社の「みなみ風」農園で栽培し、自社でケーキに加工する。そして冷凍したケーキを自社で開発した冷凍トラックで主要空港売店、主要百貨店に出荷・販売する。こうして一次・二次・三次産業の分野にまたがるビジネスモデルが形成されることになる。三次産業として展開するのは主要都市の市場であるから、売り上げは地域に還流する。1969年ウルグアイラウンド関税交渉の結果、それまでデンプンの原料として栽培されていた地域の唐芋生産は、コーンスターチの輸入により大きな打撃を受けた。その後いわゆる焼酎ブームで唐芋はいくらか見直されるとはいえ、かつての需要は取り戻せていないことを考えれば、フェスティバロ社の着眼はすばらしい。

講義のあった年の秋、NPO唐芋ワールドセンターを作るから、理事として参加してほしい、という郷原さんの申し出を受けた。地球温暖化・砂漠化、人口の増大が進行することを考えると、食料として唐芋の果たす役割はますます大きくなる。国連の「イモの日」もそういう趣旨で制定されているとうかがった。お役に立てるかこころもとなかったが、加えていただいた。活動の一環として中国、韓国の唐

芋事情の勉強に出かけたりしている。その見聞をくわしく紹介する余裕はないけれど、「隣の地域は外国」という国際性を、地域だからこそ持っているという発見をした。鹿児島からみれば東京より上海のほうが近い、ソウルもそうである。またNPOを立ち上げるずっと以前から、唐芋にかかわる中国、韓国の農家、経営者、研究者が、フェスティバロ社を訪ねている。ちなみにフェスティバロ社は、今年5月韓国の食品クラスターに進出する契約を結んだ。日本企業としては初めてと聞く。

わたくしの近所に高校時代の旧友がいる。NPO唐芋ワールドセンターに参加することにしたと彼に話をしたところ、NPOの趣旨を聞いて触発されたのか、彼のお父上の話をしてくれた。話によればお父上は東大農学部で卒業し、卒業後旧満州鉄道調査部に勤務されている。ある日満鉄調査部のころのことを彼に述べられた。友人の記憶によれば、ロックフェラー財閥は満鉄調査部に資金を提供して、中国東北部(満州)地域における唐芋の栽培・育成状況の調査を依頼していたという話だったそうである。そして依頼の理由は、当時ロシアに住み迫害を受けているユダヤ人の亡命候補地を、探索することにあつたらしい。引き揚げ家族だからお父上の研究は残っていない。図書館のネットで検索してみると、お父上の名前の著作が何点か出版され、いくつかの図書館に収蔵されていることを知った。コピーを読むと確かに往時の唐芋、大豆、麦などを含む農作物の調査であるが、調査の趣旨を伝える序文・あとがきを見ても、ロックフェラーへの言及はない。さらに別のコピーを送ってもらおうかと思ったが、考えてみれば、言及のないのが当然かもしれない。満鉄調査部にはカネがあった。大人たちがやっかみ混じりにそう話すのを、少年のわたしは聞いている。農作物の調査は「満州国」の経営にも必要なのだから。ロックフェラーは気温の下がる中国東北部に唐芋などの農作物が育つか、知りたかったのに違いない。

(せちやま さとし 平成12年退職 元経済学研究科教授、専門は経済理論 現職鹿児島国際大学学長)

## 洛書

## 最近教わった事

高橋 けんし



昨年度の後期、全学共通教育科目「地球科学実験」を担当する機会を得た。地球科学実験は、課題設定を担当教員の裁量に任せているとのことだった。物理・化学実験のように決まった課題があれば教員の負担は軽そうだが、地球科学実験のモットーはそうではないらしい。だから、正直なところ、引き受けた当初は気が重かった。

色々と考えた末、「大気中のCO<sub>2</sub>を光学的手法で測定し、その時空間分布や変動特性について考察しよう」という課題にした。測定器はこちらで準備したが、その用途や目的は学生達に考えてもらうことにした。しかし、1・2回生中心の受講生に対して、実験をゼロから計画せよというのはハードルが高いと思ったので、まずは生存研のMUレーダー観測所に見学を兼ねて連れて行き、最先端の大気観測装置を紹介しつつ、CO<sub>2</sub>測定器を野外に仕掛けた。得られたデータは後々学生達の考察の題材となるが、観測所での測定を踏まえて独自の課題を考えてもらった。その議論の様子が極めて興味深い。私の課題の受講生の所属は、理、工、農、医と多彩であった。興味本位で私の課題を選んだという学生もいれば、教職に必要なだから、という学生もいた。受講の動機こそ十人十色なれど、興味やバックグラウンドの異なる学生達が集まって、あーでもないこーでもないと熱烈に議論する様子は、京大生の高いポテンシャルを感じさせてくれた。それと同時に、研究者にとっての議論の意味を私に再考させるものであった。私は彼らの横で仕事をするフリをしながら、実は耳をダンボにしていた。時折、ハッと気が付いたかのように茶々を入れてみる。するとまた議論が白熱する。議論が徐々に深まっていく様子を見ながら私は大いに感動した。私は料理がちょっとした趣味だが、学生が食材だとすると、自分自身は薄口の調味料でいようと思っていた。どういう料理ができるかは主と

して彼ら次第だが、実際の台所ではうまそうなものができるといい香りがする。彼らからなんとなくよい香りが漂ってきた。

最終的に、植物の光合成呼吸や吉田南構内での大気測定を行ってくれた。12月初旬には測定を終えて、データ解析や考察へと進んだ。受講生の一人が、講義時間以外でも情報や意見の交換ができるように、Google上でデータ共有しながらインタラクティブに進めることを提案してくれた。なかなかスマートだ。私も定期的にアクセスして進捗を見守ることにした。ところが、である。データ解析と考察は多難を極める。私自身も予想しなかったユニークなデータが取れて、学生達から質問が出てきてもすぐには答えられない。「先生、これなんですかね?」と訊ねられ、「何でかね?」と切り返すも、決して回答はぐらかす意図は無かった。彼らと共に頭を捻る。様々な仮説を立てて、皆で賛否の考察を述べ合う。やがて、気象データを用いて観測されたCO<sub>2</sub>の変動特性をうまく説明できそうだということに気が付き始める。学生達も私も意気が揚がってくる。もはや、私と彼らの感動は一体である。結局こうした討論は、講義中とネット上を含めて、成果発表会前日の深夜1時まで及んだ。

地球科学実験の魅力の一つは、教員が学生と一緒に考える姿勢から生まれてくるのかもしれない。多感な若き学生達は、そういう教員の姿勢に対して敏感なようだ。事後アンケートの回答に、物理・化学実験よりも面白かったという感想を複数見かけた。物理・化学実験の必要性は疑う余地がないし、地球科学実験で取り組まれる課題のいくつかは、物理・化学実験での学習内容を礎としている。だから、アンケート結果の解釈には注意を要する。しかし、そうしたアンケートの回答や、一致団結して成果発表会に臨む学生達の眼差しから放たれる輝きに照らされて、私の半年間の苦労は一気に吹き飛んだ。「教えるということは、教えられるということ」という言葉がある。その意味が少しだけ分かった気がする。

(たかはし けんし 生存圏研究所准教授、専門は大気環境化学)

## 資料

## 平成22年度総長裁量経費による採択事項

平成22年度の総長裁量経費については、下記の26件が採択された。  
採択事項および代表者等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部局名	代表者職名・氏名		関連部局
最も優秀な課程博士論文の出版助成制度	文学研究科	研究科長	佐藤 昭裕	
若手研究者出版助成制度	教育学研究科	研究科長	辻本 雅史	
法学研究科優秀博士学位論文出版助成制度	法学研究科	教授	林 信夫	
若手研究者に係る出版助成事業	経済学研究科	研究科長	田中 秀夫	
平成22年度薬学研究科若手研究者出版助成制度	薬学研究科	研究科長	佐治 英郎	
海外大学との学部学生短期相互派遣プログラム	農学研究科	研究科長	遠藤 隆	
若手研究者出版助成制度	人間・環境学 研 究 科	研究科長	富田 恭彦	
地球環境学堂出版助成制度	地球環境学堂	学 堂 長	小林慎太郎	
個人研究及び共同研究の研究成果出版助成制度	人文科学研究所	所 長	岩井 茂樹	
宇宙理工学と人文社会学の融合による「宇宙生存学」の先駆的研究とマンガ等を用いた社会への発信	生存圏研究所	教 授	柴田 一成	理学, 工学, 人・環, 基礎研, 博物館, 宇宙ユニット
遠隔地施設テレビ会議システムの整備	防災研究所	副 理 事	川井 秀一	霊長研
若手研究者による特徴ある出版物に対する出版助成制度	防災研究所	教 授	橋本 学	
英語が話せるナース・コンシェルジュ養成プラン	医学部附属病院	看護部長	秋山 智弥	
国際会議での英語プレゼン支援と多言語対応 CALL 自律学習環境の構築	学術情報メディア セ ン タ ー	教 授	壇辻 正剛	
学際融合研究による京都大学コーポレートアイデンティティの確立と発信	総合博物館	館 長	大野 照文	
初年次教育における国際シンポジウム疑似体験事業	高等教育研究 開発推進センター	教 授	小山田耕二	
若手研究者出版助成制度	高等教育研究 開発推進センター	教 授	田中 每実	
エネルギー等の地産地消エコキャンパスに向けた地域協働モデル試行～低炭素化へのチャレンジプロジェクト～	環境安全 機 構	機 構 長	大寫幸一郎	
国際交流を通して英語運用能力の育成を高めるコースデザイン推進事業	国際交流 機 構	機 構 長	森 純一	
東京オフィスを活用した京大アフリカ研究のパブリシティ事業	アフリカ地域研究 資 料 セ ン タ ー	センター長	重田 眞義	
京都大学アフリカ研究出版助成制度	アフリカ地域研究 資 料 セ ン タ ー	センター長	重田 眞義	
新たな切り口での大学情報発信 - ライブカメラの増設	総 務 部	部 長	浅野 敦行	理学, 化研, 原子炉
時計台ディスプレイ等のコンテンツ制作	総 務 部	部 長	浅野 敦行	
体育館トレーニングルームの整備	学 務 部	部 長	小杉 信行	
海外への本学紹介冊子の多言語化	研究国際部	国際担当部長	戸倉 照雄	
事務職員の国際化推進事業	研究国際部	国際担当部長	戸倉 照雄	

(代表者の職名は、平成23年4月1日現在のものである。)

(財務部)

## 平成23年度入学試験諸統計

## 1. 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学者 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
総合人間 学部	前期(文系)	65 <sup>^</sup>	262 <sup>^</sup>	260 <sup>^</sup>	251 <sup>^</sup>	69 <sup>^</sup>	<sup>^</sup>		128 <sup>^</sup>
	前期(理系)	55	205	204	201	59			
文学部	前期	220	744	744	734	226			226
教育学部	前期(文系)	50	181	181	178	51			61
	前期(理系)	10	35	35	35	10			
法学部	前期	320	861	859	846	332			332
経済学部	前期(一般)	180	560	560	556	190	1		239
	前期(論文)	25	139	88	87	25			
	前期(理系)	25	128	128	126	25			
理学部	前期	311	930	913	907	317	1		316
医学部	前期	250	648	628	620	265	5		260
薬学部	前期	80	213	213	209	83	1		82
工学部	前期	955	2579	2579	2551	970	3		967
農学部	前期	300	851	851	843	316			316
合計		2,846	8,336	8,243	8,144	2,938	11		2,927

## 〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学部	募集人員	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学者数
法学部	10人以内	24 <sup>^</sup>	18 <sup>^</sup>	10 <sup>^</sup>	5 <sup>^</sup>	5 <sup>^</sup>
経済学部	10人以内	26	16	9	4	4

## 〈医学部・薬学部学科・専攻別内訳〉

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入 学 辞退者数	追 加 合格者数	入学者数
医学部	前期	250 <sup>人</sup>	648 <sup>人</sup>	628 <sup>人</sup>	620 <sup>人</sup>	265 <sup>人</sup>	5 <sup>人</sup>		260 <sup>人</sup>
医 学 科	前期	107	324	304	302	110			110
人間健康科学科	前期	143	324	324	318	155	5		150
看護学専攻	前期	70	143	143	139	76	1		75
検査技術科学専攻	前期	37	101	101	101	38	1		37
理学療法学専攻	前期	18	39	39	38	20			20
作業療法学専攻	前期	18	41	41	40	21	3		18
薬学部	前期	80	213	213	209	83	1		82
薬 科 学 科	前期	50	114	114	111	53	1		52
薬 学 科	前期	30	99	99	98	30			30

## 〈工学部・農学部学科別内訳〉

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入 学 辞退者数	追 加 合格者数	入学者数
工学部	前期	955 <sup>人</sup>	2,579 <sup>人</sup>	2,579 <sup>人</sup>	2,551 <sup>人</sup>	970 <sup>人</sup>	3 <sup>人</sup>		967 <sup>人</sup>
地球工学科	前期	185	573	573	568	185			185
建 築 学 科	前期	80	198	198	195	82			82
物理工学科	前期	235	553	553	549	238	1		237
電気電子工学科	前期	130	369	369	364	133			133
情 報 学 科	前期	90	269	269	265	92	2		90
工業化学科	前期	235	617	617	610	240			240
農学部	前期	300	851	851	843	316			316
資源生物科学科	前期	94	——	——	——	97			97
応用生命科学科	前期	47	——	——	——	49			49
地域環境工学科	前期	37	——	——	——	40			40
食料・環境経済学科	前期	32	——	——	——	34			34
森林科学科	前期	57	——	——	——	60			60
食品生物科学科	前期	33	——	——	——	36			36

## 2. 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部	日 程	満 点	総 点																																																
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																														
総 合 人 間 学 部	前 期	(文 系) 750 点	627.00 点	469.66 点	506.10 点																																														
		(理 系) 800	640.00	417.25	463.26																																														
文 学 部	前 期	750	615.63	517.60	545.73																																														
教 育 学 部	前 期	(文 系) 900	701.99	599.24	629.62																																														
		(理 系) 900	723.73	529.10	602.17																																														
法 学 部	前 期	750	629.50	507.40	536.02																																														
経 済 学 部	前 期	(一 般) 800	679.55	563.05	590.51																																														
		(論 文) 600	401.99	335.99	361.73																																														
		(理 系) 950	724.38	616.96	651.00																																														
理 学 部	前 期	注 1 650	513.00	365.00	407.33																																														
		(数理 30 位)注 2 (400)	(353.00)	(308.00)	—																																														
医 学 部	前 期	—	—	—	—																																														
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">医学部学科別</th> <th rowspan="2">日 程</th> <th rowspan="2">満 点</th> <th colspan="3">総 点</th> </tr> <tr> <th>最 高 点</th> <th>最 低 点</th> <th>平 均 点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>医 学 科</td> <td rowspan="5">前 期</td> <td>1,300 点</td> <td>1,116.50 点</td> <td>920.28 点</td> <td>975.99 点</td> </tr> <tr> <td>人間健康科学科看護学専攻</td> <td>1,200</td> <td>822.66</td> <td>621.43</td> <td>688.50</td> </tr> <tr> <td>人間健康科学科検査技術科学専攻</td> <td>1,200</td> <td>850.73</td> <td>727.80</td> <td>769.84</td> </tr> <tr> <td>人間健康科学科理学療法専攻</td> <td>1,200</td> <td>855.43</td> <td>688.06</td> <td>741.65</td> </tr> <tr> <td>人間健康科学科作業療法専攻</td> <td>1,200</td> <td>798.63</td> <td>662.33</td> <td>719.34</td> </tr> </tbody> </table>						医学部学科別	日 程	満 点	総 点			最 高 点	最 低 点	平 均 点	医 学 科	前 期	1,300 点	1,116.50 点	920.28 点	975.99 点	人間健康科学科看護学専攻	1,200	822.66	621.43	688.50	人間健康科学科検査技術科学専攻	1,200	850.73	727.80	769.84	人間健康科学科理学療法専攻	1,200	855.43	688.06	741.65	人間健康科学科作業療法専攻	1,200	798.63	662.33	719.34											
医学部学科別	日 程	満 点	総 点																																																
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																														
医 学 科	前 期	1,300 点	1,116.50 点	920.28 点	975.99 点																																														
人間健康科学科看護学専攻		1,200	822.66	621.43	688.50																																														
人間健康科学科検査技術科学専攻		1,200	850.73	727.80	769.84																																														
人間健康科学科理学療法専攻		1,200	855.43	688.06	741.65																																														
人間健康科学科作業療法専攻		1,200	798.63	662.33	719.34																																														
薬 学 部	前 期	—	—	—	—																																														
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">薬学部学科別</th> <th rowspan="2">日 程</th> <th rowspan="2">満 点</th> <th colspan="3">総 点</th> </tr> <tr> <th>最 高 点</th> <th>最 低 点</th> <th>平 均 点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>薬 科 学 科</td> <td rowspan="2">前 期</td> <td>950 点</td> <td>731.35 点</td> <td>563.93 点</td> <td>619.20 点</td> </tr> <tr> <td>薬 学 科</td> <td>950</td> <td>717.73</td> <td>597.26</td> <td>644.50</td> </tr> </tbody> </table>						薬学部学科別	日 程	満 点	総 点			最 高 点	最 低 点	平 均 点	薬 科 学 科	前 期	950 点	731.35 点	563.93 点	619.20 点	薬 学 科	950	717.73	597.26	644.50																										
薬学部学科別	日 程	満 点	総 点																																																
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																														
薬 科 学 科	前 期	950 点	731.35 点	563.93 点	619.20 点																																														
薬 学 科		950	717.73	597.26	644.50																																														
工 学 部	前 期	—	—	—	—																																														
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">工学部学科別</th> <th rowspan="2">日 程</th> <th rowspan="2">満 点</th> <th colspan="3">総 点</th> </tr> <tr> <th>最 高 点</th> <th>最 低 点</th> <th>平 均 点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>地 球 工 学 科</td> <td rowspan="2">前 期</td> <td>1,000 点</td> <td>736.20 点</td> <td>545.73 点</td> <td>597.55 点</td> </tr> <tr> <td>建 築 学 科</td> <td>1,000</td> <td>741.85</td> <td>546.15</td> <td>607.51</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">物 理 工 学 科</td> <td rowspan="2">前 期</td> <td>(配点 A) 1,000</td> <td>744.78</td> <td>588.73</td> <td>639.63</td> </tr> <tr> <td>(配点 B) 1,000</td> <td>810.00</td> <td>720.00</td> <td>755.47</td> </tr> <tr> <td>電 気 電 子 工 学 科</td> <td rowspan="3">前 期</td> <td>1,000</td> <td>791.33</td> <td>582.33</td> <td>641.45</td> </tr> <tr> <td>情 報 学 科</td> <td>1,000</td> <td>848.45</td> <td>575.23</td> <td>632.17</td> </tr> <tr> <td>工 業 化 学 科</td> <td>1,000</td> <td>776.78</td> <td>568.11</td> <td>620.28</td> </tr> </tbody> </table>						工学部学科別	日 程	満 点	総 点			最 高 点	最 低 点	平 均 点	地 球 工 学 科	前 期	1,000 点	736.20 点	545.73 点	597.55 点	建 築 学 科	1,000	741.85	546.15	607.51	物 理 工 学 科	前 期	(配点 A) 1,000	744.78	588.73	639.63	(配点 B) 1,000	810.00	720.00	755.47	電 気 電 子 工 学 科	前 期	1,000	791.33	582.33	641.45	情 報 学 科	1,000	848.45	575.23	632.17	工 業 化 学 科	1,000	776.78	568.11	620.28
工学部学科別	日 程	満 点	総 点																																																
			最 高 点	最 低 点	平 均 点																																														
地 球 工 学 科	前 期	1,000 点	736.20 点	545.73 点	597.55 点																																														
建 築 学 科		1,000	741.85	546.15	607.51																																														
物 理 工 学 科	前 期	(配点 A) 1,000	744.78	588.73	639.63																																														
		(配点 B) 1,000	810.00	720.00	755.47																																														
電 気 電 子 工 学 科	前 期	1,000	791.33	582.33	641.45																																														
情 報 学 科		1,000	848.45	575.23	632.17																																														
工 業 化 学 科		1,000	776.78	568.11	620.28																																														
農 学 部	前 期	1,050	839.13	648.35	698.04																																														

注 1：最高点は合格者のうち総点が最も高い者の得点である。最低点は合格者のうち順位が最下位であった者の得点である。平均点は合格者の総点の平均点である。

注 2：合格者のうち個別学力検査の成績順位が「数学」と「理科」の得点合計を用いて定められる 30 位までの者の「数学」と「理科」の得点合計。

(備考) 1) 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。  
2) 総点については、合格発表時のものである。

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数  
下段…入学者数

都道府県	学 部										計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
北海道	10 5	12 4	2 1	15 5	12 3	29 13	8 2	2 1	22 10	12 3	124 47
東 北	青 森	1 1	1	1	1	3 1	1		3 1		11 3
	岩 手	2	2 1	1	1	2 1	1	2 1	1 1	1 1	13 4
	宮 城	1 1	9 2	1	5 1	1	4 2	3 1	2 6	14 1	44 14
	秋 田		2		1 1	2	4		1		10 1
	山 形	3	5 1		1 1		2	1 1		4 1	17 3
	福 島	2 1	6 1	1	1	1	3 2	2 1	2 2	4 4	6 11
	茨 城	6 1	5 1	4 1	4 1	5 1	7 1	7 2	3 1	18 4	65 13
関 東	栃 木	2 1	4 1	3 1	3 1	1	7 2	2 1	14 2	4 2	41 11
	群 馬	2 2	8 1		6 2	8 1	11 3	4 2	1 6	14 2	6 19
	埼 玉	2	7 1	5 3	5 1	9 2	24 4	3 1		22 9	15 27
	千 葉	11 1	12 4	4 2	10 2	14 5	10 1	3	2	26 4	11 21
	東 京	40 5	61 13	20 3	43 7	75 12	76 18	25 7	5 2	78 17	45 10
	神奈川	15 3	21 7	4 1	18 6	32 6	28 8	8 1	2 7	34 5	25 44
	新 潟	3	9 2	2	7 2	3 1	9 6	1 1	11 5	6 4	52 21
中 部	富 山	6 2	5 1	5 1	6 2	5 2	4 2	4 3	1 5	12 2	4 20
	石 川	5	11 5	2	12 3	12 4	13 7	12 8	1	28 15	7 46
	福 井	9 4	6 3	4 2	4 2	6	5 1	6 2	3 1	38 15	5 33
	山 梨	1	2 1			1	2 1	1		6 2	1 4
	長 野	12 4	11 3	4 1	6 1	10 3	8	6 3	2 1	19 4	5 3
	岐 阜	11 3	13 5	1	15 5	11 7	13 3	12 6	4 3	52 19	10 2
	静 岡	11 5	15 2	4 1	9 2	17 5	30 10	11 6	4 1	39 16	12 4
愛 知	29 9	49 18	15 3	57 19	41 17	74 27	17 10	23 7	171 69	63 26	

都道府県	学 部										計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
近 畿	三 重	8	20 7	2	11 4	14 9	13 5	11 2	4	51 24	18 6
	滋 賀	11 2	5 1	10 5	11 3	14 3	23 10	14 4	7 1	80 33	30 11
	京 都	47 13	86 21	22 4	111 43	101 29	70 29	74 26	26 8	299 119	114 39
	大 阪	65 21	106 43	38 12	163 71	139 41	122 50	134 49	44 18	554 207	148 66
	兵 庫	41 13	57 16	14 5	102 53	94 29	75 26	96 52	16 11	284 119	96 33
	奈 良	23 9	37 8	9 4	58 38	50 20	43 17	65 26	13 9	207 79	57 30
	和歌山	4	12 6	3 1	12 4	10 1	10 2	12 9	2 2	54 23	12 5
	鳥 取	2	1	1	5	3	3	3	2	7	2
	島 根	2	3 2		3 1	1	5 1	5 1	1	10 7	3 2
	岡 山	5 2	22 10	3 1	17 7	12 7	14 5	12 3		35 13	14 6
四 国	廣 島	21 7	25 7	5 1	35 10	19 7	32 10	18 10	6 1	90 30	20 8
	山 口	3 1	7 2	3	9 3	6 2	19 8	2	3	14 5	6 1
	徳 島	2 1	1		7 4	3	10 3	7 3	3 3	11 7	5 4
	香 川	6 2	12 4	3 1	14 5	10	12 3	5 3	3 1	32 13	7 1
	愛 媛	6 2	9 2	3 3	11 4	7 2	12 5	9 3	3 3	23 11	3 2
	高 知	1	5 1	2	2	9 2	11 4	3	4	11 3	5 3
	福 岡	11 1	21 9	5 1	31 9	32 8	28 8	13 3	6 4	96 35	35 12
九 州	佐 賀	3 2	5 2		4 2		5 1	3 1	1	5 2	3 11
	長 崎	3 1	3 1	2	1	6 3	6 2	6 3		14 3	
	熊 本	5 1	6 2	3 1	1	5 4	4 1	2 1		11 3	3 1
	大 分	1 1	1 1		3 2	2	2	3 1	2	12 2	8 3
	宮 崎	1 1	4 1		1		5 1	1	3 1	3 3	2 3
	鹿 児 島	5 1	10 4	3 1	6 2	9 5	16 5	9 2	1	22 7	8 2
	沖 縄	1	3		3 3	5 2	8 2			4 1	1 25
合 計	461 128	737 226	214 61	850 332	820 239	915 311	646 260	210 82	2,559 965	849 316	8,261 2,920

(備考) 1) 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。  
2) 高等学校・中等教育学校出身者のみ各欄に含む。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 23.3卒	浪 人 22.3以前卒	総 数	現 役 23.3卒	浪 人 22.3以前卒
総合人間学	467 認 6	257 認 1	210 認 5	128	66	62
		55.0%	45.0%		51.6%	48.4%
文学部	744 認 7	468 認 3	276 認 4	226	134	92
		62.9%	37.1%		59.3%	40.7%
教育学部	216 認 2	144 認 1	72 認 1	61	41	20
		66.7%	33.3%		67.2%	32.8%
法学部	861 認 11	525 認 6	336 認 5	332	200	132
		61.0%	39.0%		60.2%	39.8%
経済学部	827 認 6 他 1	478 認 1	349 認 5 他 1	239	120	119
		57.8%	42.2%		50.2%	49.8%
理学部	930 認 14 他 1	622 認 7 他 1	308 認 7	316 認 4 他 1	207 認 2 他 1	109 認 2
		66.9%	33.1%		65.5%	34.5%
医学部 医学科	324	183	141	110	67	43
		56.5%	43.5%		60.9%	39.1%
医学部 人間健康科学科	324 認 2	222	102 認 2	150	114	36
		68.5%	31.5%		76.0%	24.0%
薬学部	213 認 3	143	70 認 3	82	51	31
		67.1%	32.9%		62.2%	37.8%
工学部	2,579 認 18 他 2	1,715 認 8	864 認 10 他 2	967 認 2	613 認 1	354 認 1
		66.5%	33.5%		63.4%	36.6%
農学部	851 認 2	546 認 1	305 認 1	316	173	143
		64.2%	35.8%		54.7%	45.3%
合 計	8,336 認 71 他 4	5,303 認 28 他 1	3,033 認 43 他 3	2,927 認 6 他 1	1,786 認 3 他 1	1,141 認 3
		63.6%	36.4%		61.0%	39.0%

(備考) 認…高等学校卒業程度認定試験合格者 (大学入学資格検定合格者を含む)  
 他…その他の入学資格取得者  
 認, 他は内数

[外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調 (外数)]

学 部	志 願 者		入 学 者			
	総 数	現 役 22.4~23.3卒	浪 人 22.3以前卒	総 数	現 役 22.4~23.3卒	浪 人 22.3以前卒
法学部	24	23	1	5	5	0
		95.8%	4.2%		100.0%	0.0%
経済学部	26	25	1	4	4	0
		96.2%	3.8%		100.0%	0.0%

(学務部)

## 話題

## サウジアラビア・リヤドで「International Exhibition and conference on Higher Education 第2回国際高等教育フェア(IECHE2011)」および第2回サウジアラビアー日本・大学学長会議が開催

4月19日(火)～22日(金)の間、「International Exhibition and conference on Higher Education 第2回国際高等教育フェア(IECHE2011)」が、サウジアラビア王国高等教育省主催により首都リヤドで開催された。開会式では、厳重な警戒のもと同王国・ハーレド・アルアンカー大臣が臨席され、本学からは、大西有三理事・副学長、研究国際部職員2名が参加した。

今回のフェアは、各国を代表する大学が参加し、米国54校、英国64校、フランス14校、中国34校、韓国14校、日本からは京都大学、東京大学、大阪大学、東北大学、名古屋大学など19校が参加し、全体の参加数は400校を超えた。

また、リヤドで第2回サウジアラビアー日本・大学学長会議が開催された。この会議は、昨年東京で初めて開催され、文部科学省と同王国高等教育省との間で教育・科学分野における覚書が締結されたものである。今回の会議において、大西理事は、東日本大震災に対する世界中からの支援に深い謝意を示すとともに、今後の日本とサウジアラビアの教育・研究のさらなる発展に、京都大学も協力をしていくことを伝えた。

IECHE2011会場において、大西理事は、講演会にも出席するほか、2日間にわたりサウジアラビアのキングファハド大学、キングファイサル大学、アルハルジュ大学との個別面談を行い、今後の具体的な大学間の学術協力体制等、研究分野について詳細な打合せを行った。また、京都大学のブースにおいても、多くの学生からの質問に一つ一つ丁寧に答え交流を深めた。



サウジアラビア大使館スーパーバイザーの  
Dr.El-Moamen Abdalla(中央)と大西理事(右)

(研究国際部)

## 宇治キャンパスで平成23年度新入院生等のための安全衛生教育を開催

宇治キャンパスでは、4月28日(木)、宇治おうばくプラザきはだホールにおいて、平成23年度新入院生等のための安全衛生教育を開催した。

この講習は、新たに宇治キャンパスで実習・研究



トレーニングキット「あっぱくん」を使用して救急処置を練習する学生

を実施する学部4回生、大学院生および新規配属の教職員等を対象に毎年実施しているもので、今回は計268名(学生199名、教職員69名)が受講した。

宇治事業場総括安全衛生管理者の角 哲也防災研究所教授、宇治地区総合環境安全管理センター長の石川裕彦防災研究所教授のほか、衛生委員会委員等により、化学物質の管理や廃棄物・排水の取扱いなど、宇治事業場の実態に即した教育課題による講習が行われた。

また、初めての試みとして、宇治事業場産業医の石見 拓健康科学センター助教による「PUSH(簡略型心肺蘇生)『胸骨圧迫+AED』講習(ダイジェスト版)」が行われ、参加者は万一の時に備えて熱心に耳を傾けていた。

(宇治地区事務部)

## 中国・清華大学でAPRU第15回年次学長会議およびGlobal Summit of University Presidents 2011(GSUP)が開催

京都大学が加盟するAssociation of Pacific Rim Universities(APRU)(環太平洋大学協会)の第15回年次学長会議(Annual Presidents Meeting)が中国・北京の清華大学で4月24日(日)に開催された。APRUは環太平洋圏の主要大学間の相互理解を深め、環太平洋地域社会にとって重要な諸問題に対し、高等教育機関の立場から協力・貢献することを目的として設立された大学協会で、現在16カ国(地域)42大学が加盟している。第15回年次学長会議には、加盟校から学長・副学長を中心に約100名の参加があった。本学からは、松本 紘総長、森 純一国際交流推進機構長、小寺秀俊総長室長、国際交流推進機構職員1名、研究国際部職員1名の計5名が出席した。

本会議では、議長であるカリフォルニア大学サンタバーバラ校YANG学長の議事進行のもと、APRUの新しい事務局長の選出、APRU理事会構成メンバー、2010～2011年財務および事業活動報告等について審議された。APRU理事会構成メンバーについては、松本総長が2009年7月よりアジア日本枠の理事会メンバーとして2年間務めてきたが、2013年6月まで任期延長が承認された。さらに、現在空席となっているラテン・アメリカ枠、アジア全体枠の2席について審議されるとともに、理事会メンバーの選考規程が定められ、メンバー選考の透明性が図られた。また、2010～2011年事業報告では、昨年11月24日～26日の日程で本学生命科学研究科と物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)が中心となって開催したAPRUのリーサー・シンポジウム「Interface between Molecular Biology and Nano-Biology」の報告があった。

本会議前日の23日には、清華大学創立百周年を記念して、同大学にてGlobal Summit of University Presidents 2011(GSUP)が開催され、APRU加盟大学を含む世界の140余大学の学長・副学長が参加した。Summitは、主催校の清華大学GU学長、中国教育部のYUAN大臣、APRUのYANG議長の挨拶の後、LIU

中央政治局委員の基調講演で始まった。午前スピーチセッションでは、6校の学長がグローバルゼーションによって引き起こされる地球規模の諸問題に対して、世界の高等教育機関として執るべき対応・行動についてのスピーチがあった。また、午後のセッションでは、5つのテーマのもと、7つの分科会に分かれ、グローバルゼーションに対する高等教育機関の役割について議論が行われた。松本総長は、「Interdisciplinary Research Development」をテーマにした分科会にてプレゼンテーションを行った。これまでの近代文明・近代科学の抱えるパラドックスを指摘し、我々人類や地球の生存を可能とするInnovationを起こすことのできるリーダーシップを持った人材の育成に取り組むべきであると提案し、本学の取り組みを紹介した。

分科会後に行われたSummitの全体総括では、清華大学のGU学長により、Summitに参加した高等教育機関の学長は、「人知および高等教育の発展に向けた他大学との協力(Cooperation)」、「未来のリーダーとなる人材育成(Cultivation)」、「環境、健康、エネルギーといった世界規模の問題解決への貢献(Contribution)」、「文化交流促進のための高等教育社会における相互作用の創出(Creation)」の4つの「C」を高等教育機関の重要な役割と認識し、各大学をさらに進歩させる、という共同声明を発表し、幕を閉じた。



Summitの様子

(研究国際部)

## シンガポール国立大学で第1回 APRU Provosts Forum が開催

京都大学が加盟するAssociation of Pacific Rim Universities (APRU) (環太平洋大学協会) の第1回 Provosts Forumが、シンガポール国立大学で4月26日(火)・27日(水)に開催された。

第1回Provosts Forumには、26の加盟校から学長・副学長を中心に40名の参加があった。本学からは、吉川 潔理事・副学長、榎木哲夫理事補、研究国際部職員1名の計3名が出席した。

Forumの1日目は、シンガポール国立大学のビジネススクールのアドバイザーを務めるLinHart Group会長のTsun-yan Hsieh氏の基調講演で始まった。Hsieh氏は、現在は不確実性に富んだ社会となっているため、大学が輩出する卒業生が備えているべき資質、大学において真の知識やスキルをいかに獲得すべきか、またリーダー育成に対する大学の役割や価値創出について発表された。

また本Forumでは、三つのテーマ(①優れた教員の採用と保持(Faculty Recruitment and Retention), ②学際的研究(Interdisciplinary Research), ③留学プログラムの質の保証(Academic Quality Assurance for Study Abroad Program))ごとに分科会が設定され、さらに各分科会は三つのグループに分かれ、1日目午後から2日目まで1日半に渡って発表と議論が行われた。各分科会では、各グループ2名の発表者が所属大学のモデルケースを発表し、その発表をもとに参加者が議論を行った。各分科会終了後には、グループごとの全体報告セッションが行われた。

また、吉川理事は、「Interdisciplinary Research」の分科会にてプレゼンテーションを行い、本学にお

ける学際研究の取り組みとして、学術分野における学際研究として物質-細胞統合システム拠点(iCeMS), iPS細胞研究所(CiRA), および産学の学際研究として京都大学・キヤノン協働プロジェクトについて紹介し、本学は多様なバックグラウンドを持つ研究者が一つの研究の場に集まることによって、新たな研究成果が生み出される機会の創出に努めていることを発表した。



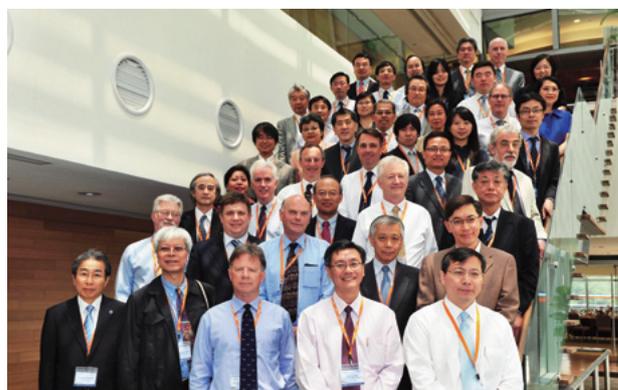
台湾大学副学長と議論する吉川理事(左)

本Forumには、初めてAPRUの会議に出席するプロボストや副学長も多く、APRUを通して新たな交流とネットワークが生まれたことに対して、Forum参加者からの評価も高く、またプロボストが、立場やそれぞれの大学の置かれた状況の違いを越えて意見交換し、相互に学ぶ意義についても肯定的な発言が相次ぐなど、盛会のうちに終了した。

なお、Forumのプログラムには、シンガポール国立大学のキャンパスツアーがあり、同大学では最先端の研究施設、学習環境を整備しているとの案内どおり、立派な研究棟、宿泊施設および同窓会施設を見学することができた。



全体報告セッションの様子



Forum参加者集合写真

(研究国際部)

## 留学生のための交通安全と防災の講習会を実施

研究国際部留学生課では、4月27日(水)国際交流センター第5講義室等において、川端警察署と左京消防署の協力を得て「留学生のための交通安全・防災の講習会」を実施した。

川端警察署からは主に自転車に関する交通ルールについて、左京消防署からは消火器の使用法や地震発生時の対応等について分かりやすく説明していただき、講義後は用意された起震車で地震体験を実施した。

東日本大震災後の講習会ということもあり、昨年度を大幅に上回る45名の留学生が参加し、災害時の対応等についての説明に真剣に耳を傾けていた。留学生にとって、今後日本において安全な留学生生活を

送るうえで、本講習会は非常に有意義なものとなった。



川端警察署による講義の様子

(研究国際部)

## 小森 悟副理事・工学研究科長が清華大学深圳研究生院創立10周年記念式典に出席

小森 悟副理事・工学研究科長は、5月15日(日)、中国の清華大学深圳研究生院創立10周年記念式典に招待され、同研究科都市環境工学専攻の津野 洋教授、田中宏明教授、八十島 誠特定准教授とともに出席、事務職員1名が随行した。

この式典は、中国広東省深圳市南山区西麗大学城清華校区で、同国の党・政府機関・大学の幹部をはじめ清華大学卒業生、学生等の参加のもと挙行された。

小森副理事は、海外からの賓客を代表して祝辞を述べ、平成13年度から10年間にわたって行った拠点大学交流事業「都市環境」やインターネットを利用した遠隔講義といった本学と清華大学との交流の歴史

を紹介した。また、工学研究科では平成17年に、同校区に「京都大学－清華大学環境技術共同研究・教育センター」を設立し、5年以上にわたって研究と教育を行っており、今後もさらなる活動範囲の拡大や国際連携の進展が期待出来るとともに、今年創立100周年を迎えた清華大学と教育・研究に取り組めることは、日中両国の国際交流・国際連携推進の大きな原動力になると述べた。

午後から小森副理事は、津野教授、田中教授、八十島特定准教授とともに、京都大学－清華大学環境技術共同研究・教育センターを見学した。



祝辞を述べる小森副理事



開会式の様子

(大学院工学研究科)

## 「日中共同持続可能な発展人材育成短期研修プログラム」中国代表団が東日本大震災被災者へ義捐金を寄付

経済学研究科附属東アジア経済研究センターが主催する「日中共同持続可能な発展人材育成短期研修プログラム」(春季研修：5月16日～6月3日)に参加する中国代表団一行から、東日本大震災被災者へ義捐金が寄付された。

5月19日の研修が終了後、曹長河団長から被災者の方々に対するお見舞いの言葉が述べられるとともに、田中秀夫経済学研究科長に義捐金が手渡された。これに対して田中研究科長から感謝の意が述べられた。



曹長河団長(左)と田中経済学研究科長

(大学院経済学研究科)

### 訃報

このたび、鈴木昭一郎<sup>すずき しょういちろう</sup>名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

#### 鈴木 昭一郎 名誉教授



鈴木昭一郎先生は、5月3日逝去された。享年83。

先生は、昭和29年3月京都大学文学部文学科を卒業、同31年3月同大学大学院文学研究科修士課程修了後、同研究科博士課程に進学、同31年12月より同33年2月までフランス政府留学生としてパリ大学文学部に留学し、同33年3月博士課程退学後、同年4月立命館大学文学部専任講師、同36年4月同大学助教授を経て、同41年4月京都大学教養部助教授に採用され、同55年12月教授に昇任された。平成4年3月に停年退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生の本学における教官歴は26年の長きにわたる。その間、教養部においては熱心にフランス語教育を行い、教科書・文法書の編纂や教授法の改善を通じて、一般教養教育に貢献された。文学部および文学研究科では、主として19世紀および20世紀のフ

ランスの作家に関するフランス文学の講義および研究指導を行い、後進研究者の育成に寄与された。また、教養部における各種委員を歴任し、常に誠実かつ有能に職務を全うし、教養部の管理・運営面に多大な貢献をされた。

専門の研究においては、小説家スタンダールの美学と創作技法を初めて歴大な戯曲習作メモから解析し、この作家の崇高な概念とその表現の秘密を明らかにした。この研究は国際的に高い評価を得ている。さらに『スタンダール研究』(1986)では、数千項目にわたる年譜の全記述について原典への遡及を可能にし、日本における年譜の通念を打破するなど、従来の作品紹介者や翻訳者の域を越えた国際的な研究が行われた。

以上のように先生は、多年にわたって本学における教育・研究に従事し、多大な業績を挙げるとともに、学生の指導、研究者の育成に尽くし、本学の管理・運営に貢献された。

(大学院人間・環境学研究科)